

単独飼育から複数飼育への変化がライオンの行動や性格とホルモン動態に及ぼす影響

○鈴木由紀子 有馬一
(横浜市立よこはま動物園)

ライオン (*Panthera leo*) は群れを作る種であるが、動物園におけるライオンの飼育環境は、獣舎の構造や広さ、繁殖制限などの様々な理由により単独飼育の個体が多く存在する。

当園のNo. 5 フラビア (メス・2012/9/16 Uganda Wildlife Conservation Education Center 生まれ) は約4年間、No. 4 ソラ (オス・2007/11/3 広島市安佐動物公園生まれ) は約5年間、繁殖制限により単独で飼育をしていた。一方で、2019年より繁殖に向け、No. 4♂とNo. 5♀の同居を開始した。今回、単独飼育から複数飼育への飼育環境の変化がライオンの行動や性格とホルモン動態に及ぼした影響を報告する。

影響の評価は、①観察②トレーニング③ホルモン動態の変化 (2019年10月1日から糞中性ホルモンエストラジオール(E2)測定実施) に着目して検討を行った。結果、①観察において、同居後、単独飼育時に比べて獣舎内での変化に対する神経質な反応が薄れたことが確認された。②採血のためのトレーニングにおいて、単独飼育時では、109回実施しても成功しなかった工程が、同居をした状態では、わずか6回で成功した。③ホルモン動態において、単独飼育時ではE2動態の変動は確認できなかったが、同居 (2019年12月24日) 以降、2週間に1度の定期的なE2の上昇が確認できた。このことから、同居によって発情回帰したと考えられる。

これらの結果から、複数頭になり本来の生態に近付いたことがNo. 5♀のアニマルウェルフェアの向上に繋がり、行動や性格、ホルモン動態に変化が起こったと考えられる。このことは、これからの動物園における飼育動物のアニマルウェルフェアを考える上で重要な視点であると考えられる。